

ディアスポラの紐帯としてのアンソロジー

——『故郷の心』とズィーベンビュルゲンの
国家社会主義について——

鈴木 道男

Was jemals war wird blasser Schein.
Herz, wappne dich!¹⁾

序

ハラルト・クラッサー (H. Krasser, 1905-1981) とヘルマン・ロート (H. Roth, 1891-1959) 編の『故郷の心』(初版 1935) は、トランシルヴァニアのドイツ系住民であるズィーベンビュルゲン²⁾・ザクセン人(以後本論ではたんにザクセン³⁾人と呼ぶ)が決定的に国家社会主義に賛同してゆく時代に編まれた詩のアンソロジーである。当時のズィーベンビュルゲンでは広く読まれ、初版から2年を経て、ロートが改編したものが、後述のように「ズィーベンビュルゲンのドイツ語詩」の副題を付してミュンヘンでも出版されている。ナチス時代に東方ドイツ人のトリヴィアルな作品が持て囃されたことは文学史上遍く知られているが、このアンソロジーはまさにその典型であるといわなければならない。しかしその「トリヴィアル」な作品の一つ一つを検討し、とくに東欧のドイツ言語語島 (Sprachinsel) の人々に焦点を当てて、ナチスとの蜜月に関する研究がなされている文献に出会うことは少ない。ただし、ザクセン人をはじめとするルーマニアのドイツ系マイノリティーたち、そしてルーマニアのゲルマニストたちは例外的に資料の保全に努め、細々とではあるが研究の灯火を絶やしていないことは特筆しておくべきことである。とはいえ、これらがドイツ文学研究の大きな枠のなかで有効に用いられる機会は乏しく、それはザクセン人の文学の水準そのものを反映した当然の帰結であるという声も少なくはない。

拙論もこのアンソロジーに収められた個々の詩に文学的解釈・評価を加えることを主たる目的とはしない。むしろこのアンソロジーの、とくに編集者のことばをよすがとして、ズィーベンビュルゲンのザクセン人というきわめて特殊な状況に置かれたドイツ人が、この時代に歴史上はじめて自らのアイデンティティーを、好む好まざるとにかかわらず実は「ディアスポラ」として意識していたことを観察し、このアンソロジーがまさにディアスポラの結束を固めるために編まれたと

いう状況を明らかにしようとするものである。またその際に、現段階では史的評価を差し控えることとしたい。このような研究のあり方については鈴木 2004 (S. 59-61) を参照願いたい。

現在のルーマニアの西半分をなすトランシルヴァニアに 12 世紀の半ばに入植を開始して以来、さまざまな政体の変遷にあっても、後述のように常に自治を保障され、例外的地位を享受して 700 年を過ごしてきたドイツ人、すなわちザクセン人は、トランシルヴァニアがアウスグライヒによって二重帝国下のハンガリーに編入されるや (1867)、自治権をはじめとし、身分を含むあらゆる特権を剥奪され、営々と築き上げたドイツ語世界を奪われた。すなわち強硬な言語政策を特徴とする「ハンガリー化」のスローガンの下、トランシルヴァニアの人口の 1 割弱を担うに過ぎない、文字通りのマイノリティーの一つに追いやられたのである。ザクセン人たちはさまざまな機会をとらえて既得権の回復を試みた。その後、第一次世界大戦の敗戦によって二重帝国が解体すると、トリアノン条約によってズィーベンビュルゲンはルーマニアの版図に入る。この国では「鉄衛団」などの右翼的な勢力が猛威を振るいはじめたものの、その矛先は主としてハンガリー人に向けられていた。それでも、「ハンガリー化」をすらはるかに上回る「ルーマニア化」の嵐が吹き荒れていたことに変わりはない。そしてその中でも、ザクセン人たちは失地回復・自治の回復に希望を失っていなかったのである⁴⁾。ナチスの東欧政策が彼らの心情に深くコミットしたのは言うまでもない。ザクセン人があやつるのは、実は本国のザクセン方言や低地ザクセン方言ではなく、中世以来不変のフランケン方言の一つであるが、ルターの改革は直ちにザクセン人の間に浸透しており、その点でも、あえて言えばプロイセン主導のナチスに対して彼らはシンパシーをいだき易かったのである。そして第一次世界大戦の際には、協商は「トランシルヴァニア」の代表に支援を約束し (1914)、後者は中欧の同盟諸国と交戦状態になったこともある。ザクセン人の置かれた立場が非常に不安定かつ弱いものになるなか⁵⁾、とくに 20 世紀生まれの若い世代が、こぞって国家社会主義に賛同していった。

『故郷の心』の編者の——上述の若い世代に属する——ハラルト・クラッサーとヘルマン・ロートについて、今日ルーマニアとズィーベンビュルゲン同郷人會を中心とする狭い文学研究の場以外で論じられることはまずない。人名を中心に約 3,000 項目を収録したミュース編『ズィーベンビュルガー・ザクセン辞典』(1992) にはロートの名すら収録されていない。さまざまな文献から断片的に人物像が見えてくる程度なのである。弁護士を本業としていたと見られる⁶⁾ 文芸批評家・翻訳家の H. ロートは後述する戦間期のザクセン人の最も重要な文化文芸誌「クリングゾール」誌上 (1936 XIII S. 295 ff., S. 346 ff., 1938 XIV S. 197-200) でズィーベンビュルゲンの民衆抒情詩の選集を編んでおり、そもそも「クリングゾール」の名親でもある⁷⁾ から、この辞典に掲載されていないのはやや訝しい。ただし、こ

こにいかなる政治的意図が働いたのかについては推し量るすべがない。ロートはベルリンで学んだ時代に後述の「クリングゾール」の創刊者ツィリッヒと親交を結んでいる⁸⁾。なお、ロート、クラッサーともに、戦後ルーマニア政府の手で逮捕された経験がある。ロートは1945年秋に選者となって方言民衆詩集 *Sammlung Altesächsische Gedichte* を発行したが、これが逮捕の直接の原因であった。また、クラッサーの逮捕理由は不明だが、逮捕当時クラウゼンベルク大学教授であったことがズーベンビュルゲン現代史のなかで偶さかに語られているのを見る程度である。この二者の業績について詳細に語っているのは、おそらく上述のミューズがズーベンビュルゲンで1924年から1939年にかけて刊行された「クリングゾール」誌を論じた『八百年後の総括』(Myß 1968)のみであろう。若いクラッサーはツィリッヒがドイツに移ってから、表面上編集長に留まっていた「クリングゾール」誌の最後の3年間の執筆主幹を担当している。ロートよりも若く、第三帝国に対する思い入れが強かった人物であったようである⁹⁾。文学及び音楽史家・ドイツ文学者としてギュムナージウム校長を経て、上述のようにクラウゼンベルク大学でも教鞭をとった。彼は戦間期に生まれた世代のズーベンビュルゲンの作家たちに絶大な影響を持っていたのである。

詩が収録されている人々のなかには、無名としか言いようのない、一介の市民と目すべき作者が少なくない¹⁰⁾。極力広く文献にあたっても、あるいは在独旧ズーベンビュルゲン出身者の同郷人会のホームページなどを頼りに検索を試みても、一向にヒットしない人々が大勢を占めているのである。唯一、ヒーンツ編の浩瀚な『ズーベンビュルゲン・ドイツ人作家辞典』(1995)はこうした人々の多くを収録する(はずである)が、残念ながらいまだA-Cの項までしか入手できない状況にある。

上述のように『故郷の心』はズーベンビュルゲンで刊行された2年後に、ロートが „Deutsche Lyrik aus Siebenbürgen“ の副題を付して改編したものがミュンヘンで出版されている。この版では、副題の通りズーベンビュルゲン以外の地域の人の詩を掲載しておらず、またクラッサーの序文の代わりに16世紀ズーベンビュルゲンの宗教改革者ホンテルス (Johannes Honter) の韻文¹¹⁾が置かれ、末尾にロートの跋文が付されている。また35年版では、詩人ごとの収録であったものが、37年版では後述のように全体を4部に大別して、個々の詩人の詩をばらばらに分けて配しており、収録詩もかなり置き換えがなされるなどの変更が行われている。

戦間期ズーベンビュルゲンの状況

二重帝国下ハンガリーにおいて強力に推進された「ハンガリー化」は公共機関や公教育の場におけるハンガリー語の強制をとまなう厳格なもので、これによって

700 年間あまり保持してきた自治特権を完全に剥奪されようとしたのを機に、ザクセン人たちが「ザクセン議会」(Sachsentsag)を創設したのが1872年である。しかし事はそれほど単純ではなく、たとえば1872年段階では、旧世代の人々がアウスグライヒを一時的な措置と見て、オーストリアの中央政府を支持していたのに対して、当時の新世代はハンガリーとの意思の疎通を重視し、一方で「小ズィーベンビュルゲン主義」¹²⁾をとнаえて、バナートのドーナウシュヴァーベンなど他のドイツ系マイノリティーとの協調を拒んでいた。この議会において新旧両世代の融和が行われたのである。その後1933年の最後の第5回議会まで、ズィーベンビュルゲンのハンガリー併合などの歴史の節目ごと(詳細は省くが、開催年と会場都市は第2回1890ヘルマンシュタット、第3回1896ヘルマンシュタット、第4回1919シェースブルク、第5回1933ヘルマンシュタット)に、ザクセン議会は「民族綱領」(Nationalprogramm, 第2回以降はVolksprogrammと呼ばれる)なる宣言を採択し、結局はさまざまな意見の対立が逆に常に求心的な方向で解決され、自治などの特権の回復を目指す結束を誇示することになったのである。

ファッセル(1995)によると、1922年にフリッツ・ファブリティウス(F. Fabritius)が創設した「自助」運動(Selbsthilfe-Bewegung)を母体に、1930年代の初めに国家社会主義的な「在ルーマニアドイツ人民族自助運動」(Nationale Selbsthilfebewegung der Deutschen in Rumänien, NSDR)が成立し、1933年のザクセン議会を牛耳ったのち「在ルーマニアドイツ人国家社会主義自助運動」(Nationalsozialistische Selbsthilfebewegung der Deutschen in Rumänien, NEDR)と改名し、1934年には過激派組織として(ルーマニア政府によって)禁止されている¹³⁾。さらにNEDRは1935年にはファブリティウスの「穏健派」と、アルフレート・ボンフェルト(Alfred Bonfert)が指導する「過激派」に分裂した。

長い自治の歴史をもつズィーベンビュルゲンのザクセン人たちの、最後の実質的な政治的議決機関がザクセン議会であるが、その1933年10月1日の第5回、歴史上最後のザクセン議会が議決した『民族綱領』は、上述のようにナチズムが守旧派を抑えて表に立った状況を余すところなく表しており、そのアースグリーンの表紙の小冊子はナチス言説そのものというべきもののようにみえる。この年にドイツでは、大統領ヒンデンプルクがヒトラーを首相に指名している。『民族綱領』前文にいわく「全能の神の名において！我々ズィーベンビュルゲンのザクセン民族(Volk)は、さらに完璧な共同体を招来して確固たるものとし、受け継いだドイツの使命に対して将来においても奉仕し、我々の名誉と力をいや増し、我々が互いを平和の下に置き、正義のために戦い、我々固有の特殊性を我々及び我々の子孫に対して保障すべきすべを十全にこころえ、この民族綱領を採択し、我々自身に課した。」¹⁴⁾

そして24条からなるその『民族綱領』の第1条は「我々は、我々がともに唯一の大民族を形成する、世界のすべてのドイツ人の統一を公然と支持する。故郷

との不易の連帯のうちに、我々はルーマニア国家の土地に立ち、その国家にわが力と忠誠を供しているのである」¹⁵⁾となっているのである。

『故郷の心』にも詩を寄せている、「クリングゾール」編集長 H. ツィリッヒの論文「第 5 回、最後のザクセン議会」(Zillich 1976) には、『民族綱領』とは別だが、同趣旨の、この議会の決議文が抄録されている。それを要約すれば以下の通りとなる。

- ・ ズィーベンビュルゲンのザクセン「民族」(Volk) は自らの故郷の土地と堅く解き放ちがたく結びついている。それゆえザクセン「民族」は、境界線が「民族」の故郷を取り囲む地域と国家に対する衷心からの信頼を表明し、ルーマニア国王カルル二世に忠誠を捧げ、その政府に敬意を払い、ルーマニアの他民族との友好を確認する。
- ・ 血と運命を共有することによってルーマニアのすべてのドイツ姉妹血族(Bruderstämme) 及びドイツの民族同胞(Volksgenossen) と結びついていることを我々は自覚している。試練のときを迎えて、彼らとは心と行為の共同体へと結合した。この共同体こそは「民族」と指導者に課せられた、ゆるぎない統一を形成するための使命である。
- ・ ドイツの統一と鋼のごとき民族意思共同体(Willensgemeinschaft) の輝かしい模範として、今日深いドイツの本質から復活した母国が我々の前に存在しており、そのあり方を我々の思想・感情・行為の道標とすべきである。
- ・ かかる使命を一身に帯びて、統一されたドイツの民族共同体としての「我々」の営為がズィーベンビュルゲンにおいて存続せねばならない。キリスト教の信仰とドイツの民族性(Volkstum) に対する忠誠から、我々は血と運命のあらゆる民族同胞と結びつき、率直かつ強力に我々のドイツ民族共同体の守りを固めようとしている。
- ・ この民族結束の不変の信条をもって、近年我々の民族とその個々の部分に対して外部から向けられたすべての攻撃を、我々は断固として撃退する。すべての友と敵は、我々の民族の同胞に対するあらゆる攻撃は我々すべてを傷つけるもので、それゆえ一丸となった反撃にぶち当たることを知っていただきたい。¹⁶⁾

これらはまさにナチス言説そのものであるが、視点を変えてこれを見れば、その言葉の中には、彼らが置かれている、非常に古典的な意味での、すなわち「故郷を離れて他民族の中に暮らす、哀愁を帯びた、迫害を受けつつある離散の民」としてのディアスポラの立場が表明されているのである。彼らはハンガリー化とルーマニア化の波の中で、歴史上はじめて実質的な存亡の危機を迎えたのである。自らを断固としてドイツ人と位置づけながらも、(同盟国側に立つ) ルーマニアという国に忠誠を尽くす、すなわち支配者ではないことを明言するという意味で、宣言は少数民族としてのありかたをも明確に位置づけているのである。ナチスドイ

ツとの強力な連帯を謳ったこの『民族綱領』が「ディアスポラ宣言」そのものである。ズーベンビュルゲンのザクセン人がそこに至った真情の吐露を『故郷の心』にみて、その意味を探ろうとするのが本論の基調であり、目的であることをここで再確認し、以下ではディアスポラとしてのザクセン人の姿を『故郷の心』から検証する。当時、さまざまな民族や政治的立場の人々が、それぞれのアンソロジーを編んで、それがその小集団の紐帯を確認する機能を持っていたことにも注意してこの詩集に向かいたい。

クラッサーの 1935 年版序文とロートの 1937 年版跋文

クラッサーがロートと共編の 1935 年版『故郷の心』に付した序文は、上述のザクセン議会の宣言と並べてみれば、明らかに戦間期のズーベンビュルゲンの詩のみならず文学全般に対するザクセン人たちの態度表明といえることができる。あたかも政治的なパンフレットのような文章である。ナチスに呼応した東方ドイツ人文学者の声として『故郷の心』を見ようとするとき、詩そのものよりもこの序文の方がはるかに興味深い。これに抗する考えを持つ人々もいたのかもしれないが、そうした声があっても、時代に封殺されたのであろう。すなわち、管見ではこれに矛盾するような内容のものがズーベンビュルゲンで出版されたことはないと思われるのである。まず、この序文のあらましを追ってゆく（以下、煩雑を避けるため、クラッサーの序文（S. 1-10）からの直接の引用は「 」のみを用いて、特にページなどの箇所を表示を省略する）。

クラッサーによればルーマニアの、存命中の詩人の抒情詩の選集が編まれるのは前例のない初めての試みであって、地域が局限されているという制限を、地域の（文学的意味での）豊かさで埋め合わせするという使命を持つものだが、さらに、「政治的な運命によって生み出され、いまだかつて文学的な意味では統一されたことのないドイツの人々の生活空間から発せられた、価値ある叙情的な声を集めたい、というさらなる隠れた目的」があった。「独特の、そして独自の法を持つ¹⁷⁾ドイツの移民地域の土地の上、南東（ヨーロッパ）の空の下で作られた最良の詩の選出」にあたっては、時代や、おそらくは詩人自身によって乗り越えられてしまうようなものに従うのではなく、少なくとも新しい選別の時が告げられるまでは、時代とその「進歩」に耐えることが約束されているものを強調するよう心がけなければならない、というのである。「従って、この選択が基準としたのは詩を詠んだ人の個性ではなく、詩の完成度なのである。個々の詩人は自分の特質の多くの面がここにいることを嘆くかもしれないが、この土地の有為の人の口から発せられた調べがこの一巻の中にまったく欠けているということはまずない。そして読者は瑕疵のない業績のうちに詩人の純粋な筆致を知ることになる」のだという。詩が採用される機が熟するのは、空虚な技巧上の巧みさによってではなく、

「民族」の中で形を与えられずに眠っていた精神の諸力が形を得ることによるのである。かくして、この選集には「一民族の喜怒哀楽が内なる故郷を見出す精神風土を明るみに出す」¹⁸⁾ 高潔な使命を帯びている、とまで述べられているのである。

クラッサーは冒頭でこの選集が「ルーマニアのドイツ人」の叙情詩集であると宣言し、また、ルーマニアのドイツ人入植地域の全域をカバーすることを目論んでいたと述べているにもかかわらず、集めたのはジーベンビュルゲンと一部はバナートのもののみである。ミュンヘンで刊行されたロートのみが編者となった1937年版では、さらにジーベンビュルゲンのものみに局限されている。クラッサーはジーベンビュルゲンとバナートに対象を絞った理由を、個々の地域の文学的状況が均一でないためであるとして、以下のように説明する。すなわち「ドイツの農民の土地」であるベッサラビアからは、掲載に値する詩人の声が上がっていない。またブコヴィーナの、とくに中心都市チェルノヴィッツでは、ドイツ語によるものにこだわらなくとも、ドイツの血統に属するものに限っていえば、手元に届いた限りでは、独自性のない詩行の巧みさをこえて固有の成長を遂げた詩となったものがない、というのである。結局この選集では精神構造と文学の伝統において根本的に相違する2地域からのみ収録されることになったのだ、という。ここでいわれている「ドイツの血統」にユダヤ人が属さないことは——ユダヤ人という言葉は一度も用いられてはいないが——自明である。こうしてこのアンソロジーは、現在ドイツ語文学の至宝であることが広く認識されているブコヴィーナのユダヤ人詩人たちをオミットしたのである。

クラッサーは続ける。収録された過去20年間の抒情詩のうち、バナートのものは高々5分の1にしか過ぎない。それは単に量的な差にとどまるのではない。バナートは、大抵はすぐにドイツ内地に差し出されてしまう若干の才能のある人は別として、地に付いて、生き生きと影響を及ぼし続ける文学の伝統を持たず、しかもハンガリーの脱ドイツ化政策によって標準ドイツ語の存続が危ぶまれており、それは今すでにバナートの詩からわかるのだ、というのである。ここで、ジーベンビュルゲンの郷土料理が、ハンガリー料理さながらのパプリカを多用するものであることを思い出さずにはいられない。

それに対して「ジーベンビュルゲンは古くからの文化地域であり、そこで作り上げられた精神生活は母国から発せられるすべての精神的影響を受け止め、組織的に吸収してきたのである。郷土芸術の狭量さに甘んじようという誘惑と、借用した、地に根付いていない教養詩(Bildungsdichtung)の空転に陥る危険の狭間で、当地では、同時にジーベンビュルゲンの存在の詩的解釈とドイツ全体のリズムとの共振とである芸術が成立した」のだという。「ルーマニアのドイツ人」のアンソロジーの試みが、結局はほとんどがザクセン人のものに終わったのは、上述のような巧妙かつ根拠に乏しい理由付けで説明するよりも、自らを高しとするザクセン人の郷紳意識、なによりも若い知識人たちの間に広がっていたいわゆ

る小ズィーベンビュルゲン主義そのものの反映と見るべきであろう。

上述のように、『故郷の心』はズィーベンビュルゲンで刊行された2年後の1937年に、ロートが„Deutsche Lyrik aus Siebenbürgen“なる副題を付して改編したものがミュンヘンで出版されている。この版では、副題の通りズィーベンビュルゲン以外の地域の人の詩を掲載しておらず、また上述のようにクラッサーの序文の代わりに16世紀ズィーベンビュルゲンのルター派宗教改革者ホンテルス(Johannes Honter)の韻文¹⁹⁾が置かれ、末尾にロートの跋文が付されているほか、35年版では、詩人ごとの収録であったものが、37年版では全体をLand, Schicksal, Leben, Glaubeに大別して、個々の詩人の詩をばらばらに配しており、収録詩もかなりの置き換えがなされるなどの大きな変更が行われている。ロートの跋文は政治性を表面化させていないものであるし、選択された詩の多くは、直截に政治性を感じさせるものが避けられているようにも見えないこともない²⁰⁾。こうした改変が行われた第一の理由は、詩の水準に対する出版社側の要求と、テーマを設定することによってそれぞれの詩の底流となっている情調を強調するものであったと思われる。しかしこれを明らかにする証拠は発見できなかった。しかしなによりも、ロートの版においても、1935年版でクラッサーが意図したのと同じ「故郷の心」だけは十二分にドイツ本国の読者に伝達できたことだろう。

ロートの跋文(S. 65-70)にはクラッサーの名があらわれず、またナチス流の言い回しがまったく影を潜めて、文学的なものになっていることが注意を引く。内容の改変には出版に値するものにしようという書店の意図が働いたものと思われるが、跋文もその意味で詩のアンソロジーにふさわしい叙情的トーンに改められたのだろう²¹⁾。「ドイツよ、ザクセン人の詩は汝に向けて書かれてはいない。しかし、ここで汝の言葉の祭壇に捧げられた供え物は一つ一つが必ずしも大いなる愛の告白ではないとしても、その愛をもって我々は、分断の時代のすべてを通じて誠実な扶養を受けてきたのであり、心では汝に語りかけることをやめないであろう。汝は我々の母であり、汝が名はこの無常の世においても、永遠に世界においても、聖別されているのである」という跋文(S. 70)の最後を締めくくる言葉はしかし、1937年に書かれたものであるということを踏まえれば、根本においてクラッサーの序文となんら矛盾するものを含んでいないと見るべきであろう。

集録された詩とその評価

ブコヴィーナのユダヤ系詩人アルフレート・キットナー²²⁾は1935年7月27日付のマルグル＝シュペルバー宛の手紙で、『故郷の心』初版について「実をいいますと、ズィーベンビュルゲンのアンソロジーは徹頭徹尾私を失望させました。たいいていの詩からは、形式が完成されていることはわかりますが、それにも

まして、強い内的体験の果てのもっとも深い印象を暗示するというよりは、強要されたもの、冷たく、しばしば苦勞してこねあげたものであることがおのずとわかるのです。もっとも、バルトやツイリッヒ、フォルベルトラのある程度の数の作品は例外ですけれども。ブコヴィーナの叙情詩の選集なら、ずっと多く、もっとよいものを提供できるでしょうに」²³⁾との感想を述べている。これは当時先鋭化した、ルーマニアにとどまらないドイツ人文壇のユダヤ人排斥に対する当て擦りでもあるが（「強要されたもの」というくだりにそれが見える）、詩の水準に対する率直な感想とみるべきである。これを先に紹介したクラッサーの序文にみえる編集の意図と比較すると興味深いが、ここでは立ち入らない。ツェラーン、アウスレンダー、ローゼン克蘭ツ、そしてキットナーらの綺羅星を擁するブコヴィーナのユダヤ系詩人たちの輝かしさに対して、この詩集に収録された詩は確かに——メッシェンデルファーや、キットナーがある程度評価したツイリッヒらといった、ゾーベンビュルゲン文学界の大立者のものも含めて——残念ながら平板の謗りを免れない。詩の形式にもなんら斬新なものはないと断言できる。しかし収録された詩には、芸術的評価とは別の次元の意味が付与されているのである。

上述のように1937年のロート編の版ではLand(16編)、Schicksal(7編)、Leben(22編)、Glaube(7編)の四つの章に詩が分かれていた。同じ分類を1935年版に適用しても、ほぼ同様の割合になるだろう。LandやGraubeがクローズアップされるアンソロジーがそう多いとは思われないし、抒情詩のアンソロジーにLiebeに関する章が見られないというのも奇異なことであるが、それは措く。ただ、SchicksalとLebenにも、一瞥するとそれ以外の章と共通する基調が滲んでいることがすぐにわかる。むしろ、どの詩をみても同じ情調を湛えていることに驚かされ、編集の意図が強く感じられるのである。すなわち「土地」、「運命」、「信仰」がディアスポラとしてのザクセン人のアイデンティティーの拠り所であることを再確認して「生活」感情を滲ませることが、ザクセン人に向けられた1935年版、全ドイツ語域に向けた1937年版の重要な機能なのである。

1937年版の冒頭を飾るツイリッヒが

Gib Gott, daß die Quelle uns wieder erspringe,
Daß Lieder zur Vesper ertönen,
Aus junger Kraft sich das Frühlicht entschwinge.
Volk sich erneu in den Söhnen! ²⁴⁾

という祈りで詩を閉じるとき、これを自らの祈りと重ね合わせるべきことを思わないザクセン人はいなかったのではなかろうか。このようにしてまさに、「民族」の苦境が凝縮された形で表現され、共同体の結束が呼びかけられるのである。そ

して Volk という一語の使用が、周辺民族との融和を強調する古い世代ではなく、ナチスに急速に同化していった若い世代の「心」を表す宣言になっているのである。また、「運命」の章に収められたアーノルト・ブルックナーの詩 *Allerseelen* (1919) はすでに表題が内容を示唆するものだが、ブルックナーが

Doch wenn östlich der Himmelsrand
Blutrot erblitzt,
Greift zum Pfluge und furchet das Land,
Von den Toten geschützt. (S. 31)

とうたうとき、この死者はあらゆるドイツ人戦死者なのである。そして畝を作るべきは、全ドイツの一環としてのズィーベンビュルゲンの土地である。同じブルックナーの *Mutter* は 1935 年版にしか収録されていない。亡き母をしのぶうたである。1937 年版であれば「生活」の章に収められるべきものであろう。この詩が

Einstmals faßt' ich deine Schürze,
Fühlte mich geschützt.
Nun ist niemand wenn ich stürze,
Der mich hilfreich stützt. (S. 17)

と嘆いてみせるとき、この ich はごく自然にザクセン人全体の心を代弁し、この詩集の中に置かれては、記号論的に直ちに母はすなわち母国ドイツと置き換えられてしまうのである。

「信仰」の章に収められた詩は、すべて当然ながらルター派の祈りである²⁵⁾。ルターの改革が始まる前に、ズィーベンビュルゲンはオスマン・トルコの手落到ちていたが、直接統治はされなかったため、カトリックの掣肘を受けることなく、「ザクセン人」たちは本国のザクセンに発する改革を受容した。それ以来、ルター派の信仰は彼らの支柱となったのである。トランシルヴァニアのハンガリー人はカルヴァン派を、そして人口の多数を占めるルーマニア系民族は、カトリックの影響を強く受けた特殊なルーマニア正教を保持した。あたかも、宗教の違いが民族の違いであるかのような状況が長く続いていたことに注意すべきである。ザクセン人のアイデンティティを語るときに、言語と並ぶ不変の特徴の双璧がルター派の信仰なのである。ゲルダ・ミースの *Dennoch* を引いてみよう。

Und wenn du willst, daß mich die Nacht verhüllt,
Daß heimlich sich der dunkle Strom vermündet,
Ich bin ja doch von dir entzündet,

Von deinem Glanz, von deiner Glut erfüllt!

Und wenn du meinem jähen Drängen wehrst,
Und wenn du auch Fesseln mich geschlagen,
Ich werde doch von dir getragen.
Ich schwelle, da du meine Kräfte mehrst!

Und wenn du mich verdammst zu schwerem Schweigen,
Daß sich kein Lied der Seele mehr entringt, –
Die Seele selbst sich aufwärts schwingt,
In deine Ewigkeit mit dir zu steigen! (S. 60)

かくして、というよりも詩集の全体のなかで、神と母国とがザクセン人の紐帯であることが宣言され、ドイツの守りを受けたズーベンビュルゲンの土地が称えられ、困難な状況の回復が祈られるのであるが、これらが時代を考慮すれば当然のことであるようであっても、ナチスによって与えられたテーマではないこと、すなわちザクセン人の「心」から発するものであること、そして実は再確認あるいは再構築を要する共通認識であったことを述べなければならない。

そもそもザクセン人たちは12世紀に「ハンガリー王の客人」として入植して以来、オスマン・トルコ時代、ハプスブルク時代を通じて自治権を失ったことがなく、15世紀以来はハンガリー人貴族とセーケイ人 (Szekler) とともに、三民族議会を戴き、ドイツ人入植地域内ではほぼ完璧に「ドイツ世界」(Deutschtum) を構築していたのである。すなわち、上述のように二重帝国下のハンガリー王国が自治権を奪うまでは、彼らは確かにドイツ人としてのアイデンティティーを持ってはいたが、分権的なドイツ世界の各地域同様、求心的な統一を必要とはしていなかった。しかし民族主義の高まりの中で、はじめて統一ドイツこそが自らの守りの要であると意識し、統一ドイツに参画することで言語島の維持を図ろうとしたのである²⁶⁾。このときはじめて、支配者集団ではなく、本国を離れて他民族の中に少数集団として存在するありかた、すなわちディアスポラとしてのありかたがアイデンティティーの問題として認識されたと考えられる。本論で当時のナチスの東方ドイツ人の文芸に対する方針に立ち入る余裕はないが、「クリングゾール」の編集長であったツィリッヒが1937年にゲッティンゲン大学から名誉博士号を受けたことが「本国」の姿勢を物語っている。ザクセン人と、東方のドイツ人との連帯を声高に叫ぶナチスの思惑は完全に一致していたのである。そしてザクセン人に関していえば、ナチスとの共闘は思惑などというものではなく、すべてをかけた選択だったのである。1940年のウィーン裁定は北ズーベンビュルゲンをハンガリー領としたが、その際にはナチスの「帰郷運動」に呼応して当

地の多くのザクセン人たちが「本国」に帰還した。そして残るザクセン人の若者は続々と武装親衛隊に参加していった。そうした若い人々だけではなく、独立主義的、親ルーマニア的、親ハンガリーのすべてのザクセン人をターゲットに、精神の引き締めを狙ってこのアンソロジーは企画されたのであり、先にみた——全ルーマニアのドイツ語現代詩のアンソロジーの風呂敷を広げながら、極力ズィーベンビュルゲンを対象を絞ろうとした——クラッサーの序文はまさにそれを示すものであることがわかる。

ブコヴィーナのユダヤ系詩人たちの動き

この時代には、ズィーベンビュルゲン以外にも、ブコヴィーナで政治的状況に促されたアンソロジー制作の動きがあった。1935年版の『故郷の心』に触発されて、ブコヴィーナでユダヤ系詩人アルフレート・マルグル＝シュペルバーが1932年以来計画し、キットナーが関与していたアンソロジー『ぶなの木』²⁷⁾の編集が本格的に始動したのである。先に引用したキットナーの書簡の続きには、「このアンソロジーを読んでみて、とにかくブコヴィーナのアンソロジーの計画に——もっとしっかり目標をきめた効果的な方法で——もう一度取り組みたいと思うようになりました」(ibid.)というくだりもある。ブコヴィーナでは、ハプスブルクの政策によって、ユダヤ人もドイツ人とまったく同格で文学活動を行っていたが、戦間期に至って、とくにはじめは友好的であったにもかかわらず次第にブコヴィーナのユダヤ系詩人を排除し始めたズィーベンビュルゲンの文学界に対抗して²⁸⁾、ユダヤ系のドイツ語詩人という枠がはっきりと打ち出されることになったのである。そして「当地の創造的なユダヤ人の生活の文学的証言に関して保存に値する」もののアンソロジーを作ろうというのがマルグル＝シュペルバーの目論見であった。しかし、ユダヤ人であってもドイツ語詩人であることにアイデンティティーの拠所を持っていたローゼン克蘭ツらは作品の掲載を拒み、なによりもユダヤ人を取り巻く環境の悪化のために出版を拒まれ、結局このアンソロジーは日の目を見ることがなかったのである²⁹⁾。

マルグル＝シュペルバーの、このユダヤ系詩人のアンソロジー作成の試みはしかし、ズィーベンビュルゲンの、ザクセン人の存在のすべてに訴えかけるアンソロジーに比べれば、一見して訴求力に劣るように思われる。ルーマニアにアントネスク元帥のファシスト政権が立つのは1940年であり、ユダヤ人の強制収容が開始されるのは1941であった。1939年に最終的に頓挫が確定した時点までの制作動機を考えるに、彼らの存在が拠って立つ世界が崩壊の危機に瀕していたことは十分認識されていたにもかかわらず、ユダヤ人の詩という枠ができてみると、あらためてその水準の高さを誇示したいという欲求が表に立って計画をなさしめたように思われるのである。マルグル＝シュペルバーもキットナーも、詩集を「ユ

「ダヤ民族」の紐帯たらしめようとは夢にも思っていなかったであろう。結局一方は成り、一方は挫折した。そして、すでにあまねく知られ、あるいは知られる価値のある彼らの「白鳥の歌」の多くは、この挫折の直後から歌われ始める。それ故、キットナーが残した「ぶなの木」に続くアンソロジーの草稿³⁰⁾は、文学的な意味では『故郷の心』をはるかにしのぐ内容を備えているのである。

藤田(2004)によれば、ローゼン克蘭ツはユダヤ人であり、かつユダヤの出自をまったく隠そうともせず、しかもユダヤ人であるにもかかわらず10年以上をシベリアに抑留されながら、ユダヤ人詩人として扱われることを拒絶した。ドイツ語詩人であることにこだわり続け、典型的な啓蒙主義的同化意識を生涯堅持したローゼン克蘭ツにとって、「クリングゾール」に拠る人々の親ナチス化、というよりもユダヤ人であることによってドイツ詩人とみなされなくなるという事実は耐え難いものであった。もとよりロートに対するローゼン克蘭ツの信頼は一方的なものであったようだが、その信頼が1935年の『故郷の心』出版の前後に打ち砕かれたことは象徴的というよりは戯画的ですらある。自らを「プロイセン人やシレジア人と同様に」ドイツを構成する一民族としてのユダヤ人と位置づけていた³¹⁾こうした「ユダヤ系ドイツ人」を排斥することに対して、たとえばズィーネルトは、ロートが消極的であったのだという。1935年の段階で、ロートはマルゲル＝シュペルバーをヘルマンシュタットに招く書簡など、通信を欠かしていないことがその証であり、「必ずしもすべてのズィーベンビュルゲンの作家が、ツイリッヒのように無条件に国家社会主義の方向に旋回したわけではない」³²⁾というのである。しかし、結果として、ロート編の1937年版も、1935年版と同じ情調を湛えたものであったし、ローゼン克蘭ツがロートと決別するに至ったのも、1935年夏にロートから届いた「文字の一つ一つにナチ・ドイツ野郎流の実にいかさまで居丈高な卑劣さが満ち溢れている」書簡³³⁾によることにも注意しなければならない。実際には、ズィーベンビュルゲンの文学にユダヤ人を入れる余地はなかったのだとすべきであろう。

この詩集が編まれた年から、すなわちナチス・ドイツとの一体化が後戻りできない状況になってから、ズィーベンビュルゲンのザクセン人にとって真に激動と試練の年月が始まる。第二次大戦中のズィーベンビュルゲンの文学状況については稿を改めて詳しく論じるべきことがあまりにも多く、ここで触れる余裕はない。

第二次大戦後のルーマニアでは、社会主義政権が1945年に多数のドイツ系男性をソ連国内での強制労働に従事させた。ズィーベンビュルゲンでも17歳以上45歳以下の男性・18歳以上35歳以下の妊婦と授乳者を除いた女性はソ連に強制連行された。1945-50年の法的差別処置は資産の没収とドイツ語の使用制限を彼らに課した。しかしズィーベンビュルゲンのドイツ世界は、実は徹底的破壊を免れていたのである。一定規模以下の住宅は接収されなかったのに加え、連行され

た人々の大多数は 10 年以内に帰宅を許されたのである。他の東欧地域のドイツ系住民の多くが、強制労働の後にはドイツ国内で解放されたために、地域文化が跡形もなくなったのとは対照的である³⁴⁾。これはアントネスク政権が倒れるまでナチスと共闘していたことからわかるように、ルーマニア人がザクセン人に伝統的に必ずしもマイナス感情ばかりを持っていたわけではないことから説明できるかもしれない。しかも、差別措置の間も、ルター派教会での集会は干渉を受けず、ザクセン人のギュムナージウムでは相変わらずドイツ語で授業が行われていた。冒頭で述べたロートとクラッサーの逮捕などは、むしろ象徴的な見せしめに属するものであったと思われるほどである。ズィーベンビュルゲンに多くの文献が残され、現在もお同郷人会などが持つ研究組織がその散逸の防止と出版に努めることができるのも、戦後のザクセン人に対するルーマニアのいわば寛大な措置によるところが大きいともいえよう。ただしチャウシェスク独裁時代における飢餓輸出の状況はザクセン人も逃れることはできなかった。クリスマス革命の後、ザクセン人が続々とドイツに「帰郷」したが、彼らが帰るべき故郷が、800 年の伝統を持つズィーベンビュルゲンではなくてドイツであるという認識が確認されたのが戦間期であり、その手段・媒体が「クリングゾール」誌や、その同人からでた『故郷の心』というアンソロジーであったこと、すなわちナチス・ドイツの宣伝パンフレットによるのではなく、ザクセン人の中から形成されていったことに注意を喚起して本論を閉じる。

『故郷の心』収録詩人一覧

[] 内は 1935 年版のみに収録の詩、{ } 内は 1937 年版のみに収録の詩。
生没年は 35 年版の目次に添えられたものおよび 37 年版巻末の生没年表も参照した。

- ・ **Freiherr v. Aichelburg**, Wolf Pola (Jugoslawien) 1912-
作家・作曲家・翻訳家・芸術及び音楽批評家。フライブルクから両親の移住によってヘルマンシュタットへ。1977 年から在西ドイツ。*Die Ratten von Hameln* 1969 などの作品がある。「クリングゾール」誌ではじめて世に出た。
収録詩： *Der Berg*, [*Nacht in den Bergen*.], {*Wiesenbach*}
- ・ **Bacon, Josef** (37 年版になし) Schläßburg 1857-?
医師・郷土史家。クラウゼンブルク、ブダペスト及びウィーンで医学を学ぶ。医療環境の改善に努めた外科医。教会理事。
収録詩： [*Heimat*]
- ・ **Barth, Peter** (37 年版になし) Blumenthal 1898- ?
没年をはじめ人物の詳細は不明。ズィーネルトによればバナートの詩人³⁵⁾。ズィーベンビュルゲン出身者に局限された 1937 年版からは除外されている。
収録詩： [*Im Bann der Schöpfung*, *Feuerrosen*, *Ein Mädchen schlägt Schnee*, *Der sterbende Sommer*, *Die Zeit rinnt*, *Septemberlied*, *Wie lange her*, *Hinter deinem Angesichte*, *Sternflur*, *Vorbei im Flug*]

- ・ **Bruckner, Arnold** Hermannstadt 1876-1936
行政家。ドイツ系新聞の記者，地区教会理事などを歴任。クラウゼンブルクとベルリンで法学を学ぶ。文学分野では、『故郷の心』収録の2編が知られるのみ。
収録詩： *Allerseelen* (1919), [*Mutter*]
- ・ **Capesius, Bernhard** Hermannstaadt 1889-1981
作家・言語学者。イエナとブダペストでドイツ文学，古典文献学，神学を学ぶ。ズィーベンビュルゲン方言研究で学位取得。ヘルマンシュタットのギュムナージウム教師の後第一次大戦のイタリア前線に。のちブカレストのドイツ語学校教師，ブカレスト大学でも講義。1957年から『ズィーベンビュルゲン辞典』の編集を指揮。*Der schöne Tod* 1919などの作品がある。
収録詩： [*Zeit geht vorbei. . .*], [*Tag glüht empor*]
- ・ **Dutz, Schuster** (37年版作者名欄にはSchusterとして掲載) Mediasch 1885-1968
作家。クラウゼンブルク，ウィーン，イエナ及びマールブルクで博物学と化学を学ぶ。1907年に帰郷後40年間ギュムナージウム教師を勤める。1925年方言雑誌 *Bäm Hontertsreoch* を創刊するがまもなく廃刊。方言で詩と物語を書く。代表作：*Eos menjer Aehrevakanz* 1921
収録詩： *De Johreszejden*, [*Er schnoat*, *De Bässelekea*, *Det Ümgekiurt*]
- ・ **Folberth, Otto** Mediasch 1896-Salzburg 1991
作家・編集者。代表作：*Meister Eckhart und Laotse* (Dissertation) 1925
収録詩： *Lied auf Siebenbürgen*, [*Der Weihnachtskatalog*, *Der Dichter*]
- ・ **Gabriel d. j., Josef** (37年版になし) Mercydorf 1907- 没年をはじめ人物の詳細は不明。
収録詩： *Zerfall*
- ・ **Geißler-Nußbaecher, Trude** (35年版になし) Kronstadt 1891- 没年をはじめ人物の詳細は不明。
収録詩： [*Siebenbürgischer Bauernstickerei*, *An die schwarze Kirche in Kronstadt*]
- ・ **Hajek, Egon** Kronstadt 1888-Wien 1963
作家・文学史家・音楽学者。軍楽隊長の子。ベルリンとブダペストでドイツ文学，ラテン語学，神学及び音楽を学ぶ。表現主義の影響を受けた。
収録詩： [*Advent*, *Märchenreise*, *Die alte Spieluhr*, *Hundeabenteurer in Berlin*, *Zwei Teppichgedichte*] *Rotes Vließ*, *Großer Perser*, [*Meister Eckehart*]
- ・ **Höchsmann, Friedrich Siegbert** (35年版になし) Neustadt am Harbach 1874- 没年をはじめ人物の詳細は不明。
収録詩： [*Mittsommer*]
- ・ **Klöß, Hermann** Mediasch 1880- 没年をはじめ人物の詳細は不明。
収録詩： *Die Zauberblume*, *Abendläuten*, [*Widmung*, *Stiller Herbst*]
- ・ **Leicht, Hans** (35年版になし) Schäßburg 1886-Budapest 1937 人物の詳細は不明。
収録詩： [*Nächtlicher Ritt*, *Fronturlaub in Schäßburg*]
Maurer, Georg Sächsisch-Reen 1907- 没年をはじめ人物の詳細は不明。
収録詩： [*Zwei biblische Sonette*] *Erschaffung Evas*, *Gedicht*, *Luther im Kloster*, *Gedanken um Gott*, [*Der ewige Soldat*, *Die Schöpfung*, *Frauen am Grab*]
- ・ **Meschendorf, Adolf** Kronstadt 1877-1963
作家。シュトラースブルク・ウィーン・ブダペスト・ハイデルベルク・クラウゼンブルクおよびベルリンで文献学・神学・哲学を学ぶ。博士論文はクライストの散文作品論(1910)。ヘルマンシュタットで教職。1936年ブレスラウ大学名誉博士。文化雑誌 „Karpthen“ (1907-1914) を評論と作品発表の場とした。代表作 小説 *Leonore* 1920 など。

- 収録詩： *Siebenbürgische Elegie, Burzenländer Berge, Hirschenpitaph in der Herman-schlädter Stadtpfarrkirche*, [Meiner Bäume, Herbstgedicht]
- ・ **Mieß, Gerda** Bistritz 1896- 没年をはじめ人物の詳細は不明。
収録詩： *Dennoch*, [Meinem Kinde], {*An der unteren Donau, Mond*}
 - ・ **Neustädter, Erwin** Tartlau 1897-Kaufbeuren 1992
作家。第一次世界大戦中兵役。ミュンヘン、フライブルクなどでドイツ文学、英文学、神学を学ぶ。クローンシュタットのホンテルスギュムナージウムの教師。戦後を西ドイツで過ごす。代表作 *Der Jüngling im Panzer* 1938
収録詩： *Im Schutz der Berge, Kriegerfriedhof, Sommerabend* [Vorfrühling, Lied vom Honterusfest, Sommersonntag, Mondesaufgang, Am schwarzen Meer, Ausklang]
Nussbächer, Konrad Kronstadt 1894- 没年をはじめ人物の詳細は不明。
収録詩： *Tömoschland* [Trostbild], {*Lebensherbst*}
 - ・ **Piringer, Otto** Broos 1874-1950
方言作家。マールブルク、ベルリン、クラウゼンブルクで文献学と神学を学ぶ。教師、牧師を歴任。*Schärhibesker, Lastisch Geschichten ä saksesche Reimen* 1912 など。
収録詩： *Ernte*.
 - ・ **Reisner, Erwin** Wien 1890- 没年をはじめ人物の詳細は不明。
収録詩： *Aus der Tiefe*.
 - ・ **Roth, Alfred** Hermannstadt 1884- 没年をはじめ人物の詳細は不明。
収録詩： *Das war nicht ich*.
 - ・ **Roth, Otto** (37 年版になし) Hermannstadt 1899-? 没年をはじめ人物の詳細は不明。
収録詩： {*Aus ihrem Tagebuch*}
 - ・ **Scherg, Kurt** Kronstadt 1904 没年をはじめ人物の詳細は不明。
収録詩： *Karussellfahrt*, [An die Nacht], {*Nacht*}
 - ・ **Schlandt, Heinrich** (37 年版になし) Kronstadt 1858-? 没年をはじめ人物の詳細は不明。
収録詩： [Menjer Fra zem Krastdoch]
 - ・ **Schmidt-Endres, Annie** (37 年版になし) Lenauheim 1903- 没年をはじめ人物の詳細は不明。
収録詩： [Heimgang]
 - ・ **Schuleri, Karl-Heinz** (37 年版になし) Broos 1911-? 没年をはじめ人物の詳細は不明。
収録詩： [Lied junger Krieger]
 - ・ **Schullerus, Eduard** (35 年版になし) Kronstadt 1877-1914
抒情詩人。1907 年から Karpaten の恒常的な同人、同志に自作を発表。
収録詩： {*Petersberg, Im Sturm der Zeit*}
 - ・ **Schuster, Hans** Halvelaggen 1896- 没年をはじめ人物の詳細は不明。
収録詩： *Mit dir, Siebenbürgen*.
 - ・ **Wolf-Windau, Michael** Windau 1911-Hangschlag/Niederösterreich 1945
詩人。貧農の出。国民学校の後は独学。脊椎の重病のため、死去の 10 年前から車椅子で生活。1966 年にミュンヘンで詩集出版。
収録詩： [Erntetag] {*Einem Frühverwaïßten, Rogate*}
 - ・ **Wühr, Hans** (35 年版になし) Sächsisch-Regen 1891-Grünwald bei München 1982
美術史家・詩人。第一次大戦応召前にベルリン、ジュネーブ、ミュンヘン、ブダペスト、クラウゼンブルクで学ぶ。ベルリン、バイエルン州立博物館に勤務。
収録詩： {*Admiral, Apollofalter, Trauermantel*}

・ **Zillich, Heinrich** Kronstadt 1898-Starnberg 1988

作家・詩人・文化政策家・出版者。*Klingsor* 誌 (1924-39) 創刊者の一人。第一次大戦中イタリア戦線に立った後、ベルリンに学ぶ。1936 年以降、ゾーベンビュルゲンとのコンタクトをたないままドイツのシュタルンベルクに移住。ゲッティンゲン大学名誉博士 (1937)。ツィリッヒらが創刊した「クリングソーア」誌は、それ以前はユダヤ人も参加しており、ローゼン克蘭ツの意義を認め、またアウスレンダーの詩を掲載していたにもかかわらず、1933 年のザクセン議会の頃から、ツィリッヒの指導の下で国家社会主義的傾向を強めた。Sb.-S 文化賞受賞 (1968)。代表的小説 *Zwischen Grenzen und Zeiten* (1936)

収録詩：{*Verwandlung des Jahres, Erinnerung, Die treulose Frau,*} *Der Abendstern, Ballade von unbekannten Soldaten, Aus Tag ward Nacht, Der Schlaf, Spätsommer, Kühle Verheißung.* {*Deutsches Lied in Siebenbürgen, Ballade von den reisigen Kaufleuten im Morgenland, Inschrift nach zehn Wanderjahren, Pflügender Bauer, Entscheidung*}

(37 年版には作者不詳として *Um Üren* なる方言詩あり)

使用テキスト

Roth, H. & Krasser, H. (Auswahl der Gedichte): *Herz der Heimat. Gedichte.* Vlg. von Krafft & Drotleff, Hermannstadt. 1935

Roth, H. (Hrsg.): *Herz der Heimat. Deutsche Lyrik aus Siebenbürgen.* Albert Langen/Georg Müller, München. 1937

注 釈

- 1) Bernhard Capesius „Zeit geht vorbei ...“ in: *Herz der Heimat* (1935) S. 35
- 2) 「ゾーベンビュルゲン」はトランシルヴァニアのドイツ名だが、本論では特にそのドイツ人居住地域をさすために用いる。なお、後述のパナートは現在のルーマニアではトランシルヴァニアの一部と認識されている。
- 3) 「ザクセン人」という呼称は、彼らの出身地というよりは、ハンガリー人がドイツ人をサーシ、すなわちザクセン人と呼んでいたことによるところが大きい。詳細は鈴木 2002 参照。
- 4) 中世の入植以来のザクセン人たちのアイデンティティーの変遷については鈴木 2002 参照。
- 5) ゾーベンビュルゲンなど、ルーマニアの主要なドイツ人地域の歴史については鈴木 1997 参照。
- 6) 注 33) 参照。
- 7) MyB 1968 S. 33, 36 参照。「クリングゾール」„Klingsor Siebenbürgische Zeitschrift“は、当初ルーマニアのドイツ語詩人たちを広く発掘し、交流させる方針を採り、ブコヴィーナのユダヤ系ドイツ語詩人マルグル＝シュペルバーやアウスレンダーを育てた。しかし 1930 年代後半には国家社会主義の宣伝雑誌の様相を呈するに至っている。これはもちろん、編集者ツィリッヒと主筆クラッサーの方針である。
- 8) Sienerth 2002 S. 90 参照。

- 9) ibid. S. 90-93
- 10) 収録された詩人の、現在知りうる限りの情報からまとめた略歴などは本論末の『故郷の心』収録詩人一覧に付す。
- 11) Spruch auf der Landkarte von
Siebenbürgen (1532)
Vom Rein und Sachsen ich gemein
Bin aufgewachsen in großem Schein,
Hab weiter freundschaft gunst und eer
Bey fremden willen suchen meer,
Szo hat umbkert all meinen rat
Der manche Reich genidert hatt,
Und meer wirbt nidern mit der zeit,
Noch hoff ich auf seine gerechtigkeit.
- 12) バナートはズィーベンビュルゲンに隣接し、後者に含めて論じられることも少なくないが、マリア・テレージアがドナウ川流域の開発のために入植させたカトリック地域である。ブコヴィーナはハプスブルクの帝室直轄拠点地域で、財力を当てにしたオーストリア政府が早くからユダヤ人を解放し、中心都市チェルノヴィツに集め、ドイツ人と同格としていた。両地域とも、いわばハプスブルクの土地なのであった。
- 13) Fassel (1995) S. 75 f.
- 14) Sachsentag 1933 S. 1
- 15) ibid.
- 16) Wagner (Hrsg.) 1981 S. 287 f.
- 17) もちろんこれは「持っていた」とするべきである。中世以来の三民族平等議会（ハンガリー人貴族、セーケイ人、ザクセン人からなる、ラテン語を使用言語とする議会）の一員として、ザクセン人が他民族の掣肘をまったく受けずに自治組織 Nationsuniversität による支配を確立してきたことをさす。
- 18) この一節は Preußische Dichterakademie の会員であった詩人コルベンハイアー (E. G. Kolbenheyer 1878-1962) の引用である旨記されている。
- 19) 注釈 10 参照
- 20) 後に述べるブコヴィーナのユダヤ系詩人マルグル＝シュベルバーとロートとの往復書簡 (Guțu (Hrsg.) 1992) を分析したズィーネルトは、クラッサーとロートの立場の相違を強調し、「すべてのズィーベンビュルゲンの作家が、必ずしもツィリッヒのように無条件に国家社会主義の方向に旋回していたわけではない」と述べている。(Sienerth 2002 S. 91)
- 21) たとえば、拙論の冒頭にモットーとして引用した一節を含むカベジウスの詩は省かれ、かわりに同じ詩人の多少当たり障りの少ない詩が収録されている。
- 22) キットナー (Alfred Kittner 1906-1991) には、戦間期から戦後にいたるブコヴィーナ出身の詩人たちの詩の散逸を防ぐために、多くはタイプライターで、一部は手書きでコレクションを継続していた隠れた業績がある。これは明らかに、挫折した後述のマルグル＝シュベルバーのアンソロジー (『ぶなの木』) の延長線上にある試みである。その原稿はキットナーが西ドイツに亡命した際に、作家クラウス・シュテファニーニらの手でかろうじて救い出され (本人談)、現在ミュンヘンの東方ドイツ人会館図書館に保管されている。多くの作者の著作権が複雑で確認のしようもないため、公刊はされていないが、その抄録がアミー・コリンとキットナー自身の手で出版されたことがある (Colin & Kittner 1994)。全体へのアクセスも容易でないが、筆者 (鈴木) は許可を得て全編を写真撮影し、現在鋭意分析中である。

- 23) 引用は Guțu (Hrsg.) 1992 S. 60 より。
- 24) *Deutsches Lied in Siebenbürgen* (S. 8)
- 25) 知識人たらしとするザクセン人の若者は、ほとんどが新教地域の大学に留学し、少なくとも副専攻で神学を修めていたことにも注意すべきである。
- 26) 鈴木 2000b, 2002 参照。
- 27) ブコヴィーナのドイツ名 Buchenland は文字通り「ぶなの木の国」である。
- 28) 注 6 参照。
- 29) 詳しくは藤田 2004 参照。
- 30) 注 22 参照。
- 31) 藤田 2004 S. 83 参照。
- 32) Sienert 2002 S. 91
- 33) Brief an Margul-Sperber am 25. 2. 1939. in: Guțu, „Und vor dem Fenster warten die Träume“ S. 169 (Anm. 42) 藤田 2004 S. 84 も参照。なお、この書簡でローゼンクランツはロートを「弁護士」と呼んでいる。
- 34) 戦後のザクセン人たちの状況については鈴木 2000b 参照。
- 35) Sienert 2002 S. 90 Anm.

文 献

- 鈴木道男 (1997) ルーマニアのドイツ言語語島の文化的意味について I. 三つの言語島の過去と現在, 東北大学言語文化部『言語と文化』第 8 号, S. 125-144
- 鈴木道男 (2000a) ドイツ語文学・郷土文学・マイノリティ文学 ズーベンビュルゲンの文学 (1) ——ルーマニアのドイツ言語語島の文化的意味について II ——, 東北大学言語文化部『言語と文化』第 11 号, S. 169-192
- 鈴木道男 (2000b) ズーベンビュルゲン・ドイツ人の民族意識と文学, 平成 10-11 年度科学研究費補助金研究成果報告書『ヨーロッパ再編にみる地域意識と文学』(課題番号 10610529) S. 20-29
- 鈴木道男 (2002) ズーベンビュルゲン・ザクセン人の起源とアイデンティティーの変遷について, 平成 13 年度東北大学大学院国際文化研究科プロジェクト経費研究成果報告書『東欧多元言語文化社会の形態的研究』S. 1-8
- 鈴木道男 (2004) ディアスポラの観点からのドイツ文学研究における未開領域: ズーベンビュルガー・ザクセンの存在とその文学, 原研二編『ディアスポラの文学』(日本独文学会研究叢書 027) S. 52-61
- 藤田恭子 (2004) ルーマニア領ブコヴィナにおけるユダヤ系ドイツ語文学の多重的周縁化——未完のアンソロジー『ぶな (Die Buche)』をめぐる——, 平成 14-15 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) (2))『現代文学に見られるマイノリティ集団の内的多重性の表出——ジェンダー・階層・言語——』S. 71-88
- Colin A., & Kittner, A. (Hrsg.) *Versunkene Dichtung der Bukowina: eine Anthologie*. München: Fink, 1994
- Corbea-Hoisie et al. (Hrsg.) *Stundenwechsel. Neue Perspektiven zu Alfred Margul-Sperber, Rose Ausländer, Paul Celan, Immanuel Weissglas*. GGR-Beiträge zur Germanistik & Jassyer Beiträge zur Germanistik 9, 2002
- Fassel, H.: Deutsch-rumänische Kulturbeziehungen in der Zwischenkriegszeit. Allgemeine Voraussetzungen und regionale Besonderheiten. in: Motzan u. Sienert (Hrsg.) 1997, S. 69-94

- Guțu, G.: „Und vor dem Fenster warten die Träume“ – Moses Rosenkranz’ Briefe an Alfred Margul-Sperber In: Neue Literatur Jg. 41 (1990) H. 3-4
- Guțu, G. (Hrsg.): Alfred Kirrner – Alfred Margul-Scherper. Der Briefwechsel (1932-1966) in: Zeitschrift der Germanisten Rumäniens Jg. 1 H. 1 (1992) S. 58-72
- Hienz, H. (Hrsg.): *Schriftsteller-Lexikon der Siebenbürger Deutschen, Bd. 5*. Böhlau, Köln, 1995
- Motzan, P. u. Siennerth, S. (Hrsg.): *Deutsche Regionalliteraturen in Rumänien (1918-1944)*. Verlag Südostdeutsches Kulturwerk, München. 1997
- Myß, W.: *Fazit nach achthundert Jahren. Geistesleben der Siebenbürger Sachsen im Spiegel der Zeitschrift „Klingsor“*. Verlag Südostdeutsches Kulturwerk, München. 1968
- Myß, W. (Hrsg.): *Lexikon der Siebenbürger Sachsen*. Wort und Wort Verlag, Innsbruck. 1993
- Sachsentsag am 1. Oktober 1933 in Hermannstadt: *Volksprogramm der Siebenbürger Sachsen, beschlossen vom Sachsentsag am 1. Oktober 1933 in Hermannstadt*. Buchdruckerei Johann Göts Sohn, Kronstadt. 1933
- Siennerth, S.: Alfred Margul-Sperbers Korrespondenz mit siebenbürgisch-sächsischen Autoren in: Corbea-Hoisie et al. (Hrsg.) 2002
- Wagner, E. (Hrsg.): *Quellen zur Geschichte der siebenbürger Sachsen 1191-1975*. Böhlau, Köln. 1981
- Zillich, H.: Der fünfte und letzte Sachsentsag in: *Südostdeutsche Vierteljahrblätter* 23/1973, S. 228-232

本論文は平成 17, 18 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）, 課題番号 17520218）「ディアスポラ・アイデンティティーの構築と文学——文学が形成した文化ナショナリズム——」（研究代表者：鈴木道男）の助成を受けた。

Eine Anthologie als einigendes Band einer Diaspora

– Das „Herz der Heimat“ und der siebenbürgische Nationalsozialismus –

Michio SUZUKI

„Herz der Heimat“ (Hermannstadt, 1935) ist eine deutschsprachige Lyrik-Anthologie, die von Herman Roth (1891-1959) und Harald Krasser (1905-1981) in Siebenbürgen herausgegeben wurde. Die 77 Gedichte der 26 Dichter aus Siebenbürgen und dem Banat entstanden alle in der Zwischenkriegszeit. Nach zwei Jahren erschien eine neue Auflage in München, in die Roth als Herausgeber nur die Werke siebenbürger-sächsischer Dichter aufnahm. In der neuen Auflage gliedern sich die Gedichte ihrem Inhalt nach in vier Teile: „Land“, „Schicksal“, „Leben“ und „Glaube“. Merkwürdigerweise gibt es in dieser Gedichtssammlung keinen Teil „Liebe“, welche eigentlich eines der wichtigsten Themen für diese Literaturgattung sein sollte. Wenn Roth und Krasser aber auch bereits für die erste Auflage die Gedichte gegliedert hätten, hätten sie sich wohl ebenfalls für dieselben vier Teile ohne Teil „Liebe“ entschieden. Denn das autonomisch regierte „Land“ und der lutherische „Glaube“ spielten in diesen Sammlungen die allerwichtigste Rolle.

Die beiden Herausgeber gehören zur Generation der Siebenbürger Sachsen, die sich rasch dem Nationalsozialismus näherte und anpasste. Beide erhielten enge Beziehungen zur wichtigsten siebenbürgischen Kultur- und Literaturzeitschrift *Klingsor* (1924–39) aufrecht. Diese Zeitschrift stellte am Anfang auch die Werke der jüdischen Dichter aus der Bukowina vor. Alfred Margul-Sperber und Rose Ausländer hatten in *Klingsor* sogar ihren ersten dichterischen Auftritt. Gerade diese Zeitschrift verwandelte sich aber allmählich in ein nationalsozialistisches Propagandamedium. Vor allem Krasser, der das Vorwort für die erste Auflage der Sammlung schrieb, könnte man als einen der wichtigsten Sympathisanten und Vertreter des siebenbürgischen Nationalsozialismus betrachten. Sein Vorwort ist sozusagen ein literalisches *Volksprogramm*, das im Jahr 1933 beim 5. Sachsentag, den die jungen Nationalsozialisten beherrschten, schriftlich ratifiziert wurde.

„Herz der Heimat“ zählt offensichtlich zur typischen Trivalliteratur der Deutschen Ostens, die vor dem Hintergrund des Nationalsozialismus unberechtigt hochgeschätzt wurde. Die meisten Gedichte beachten bloß traditionelle oder altmodische Form und sind eintönig. Die Anthologie hat also einen monotonen Grundton, der

mit der damaligen Heimatliteratur übereinstimmt und harmoniert:

Was jemals war wird blasser Schein.

Herz, wappne dich!

(aus: B. Capesius „Zeit geht vorbei ...“ in: *Herz der Heimat* 1935)

Der Ton kommt aber nicht aus nationalsozialistischem Deutschland, sondern quoll sicher aus dem *Herz* der Siebenbürger Sachsen selbst hervor. Nach dem „Ausgleich“ im Jahr 1867 wurden sie durch die ungarische Regierung des Vorrechts der politischen Autonomie beraubt, das sie über 700 Jahre lang gehalten hatten. Die stolze *Gentry* kam zu einer Minderheit herab, die zuerst der Ungarisierung und dann, nach der Abtretung an Rumänien infolge des Vertrags von Trianon, der Rumänisierung ausgesetzt war. Unter solchen harten Umständen bemühten sie sich aber stets, ihre eigenen sprachlichen und geistigen Traditionen als deutsche Sprachinsel sowie das Deutschtum im europäischen Osten aufrechtzuerhalten. Vor dem „Ausgleich“ hatten sich die Siebenbürger Sachsen gar nicht als Diaspora betrachtet. Erst durch die Auseinandersetzung mit der Ungarisierung verwandelte sich ihre Identität gründlich. Auf diesem Nährboden wurde der Nationalsozialismus eingeführt und übte besonders auf die unterdrückte Generation tiefen Eindruck aus. Der erste Artikel des obengenannten *Volksprogramms* lautet:

Wir bekennen uns zur Einheit aller Deutschen der Welt, mit denen wir ein einziges großes Volk bilden.

In unwandelbarer Verbundenheit mit unserer Heimat stehen wir auf dem Boden des Staates Rumänien, dem wir unsere Kraft und Treue zur Verfügung stellen.

Diese Sätze sehen wie ein bloßer Nazi-Diskurs aus. Tatsache ist aber auch, dass dieser Aufruf das Herz der Siebenbürger Sachsen als Diaspora ausschüttete, die sich leidenschaftlich nach der Hilfe des Vaterlandes sehnte. In dieser Situation musste diese Diaspora ihr Zusammengehörigkeitsgefühl nach innen verstärken und zugleich ihre Existenz als Vorposten im Osten nach außen hervorheben. Gerade dafür wurden diese Gedichte gesammelt und veröffentlicht. Diese Anthologie appellierte sowohl an ihre Landsleute als auch ans Vaterland, und wünschte sich ein und dasselbe: die Einheit. Und das ist ihr gelungen.